

2019. 11. 5 (火)

見えないものとの出会い

山口七重

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

(コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章 16-18節)

将来の夢

今月のチャペルテーマは「出会い」ということですので、今日は「見えないものとの出会い」として、自身の証等も交えつつお話しさせていただきますければと思います。

私には小学生と高校生の子どもがいますが、子どもたちが幼少期の頃、よくこんな質問をしてきました。「母さん大きくなったら何になりたい?」当時、30(歳)を超えており、すでに働いていましたので、その場は考える振りして「電車の運転手になりたい」や「保育所の先生になりたい」と話していた子どもたちにあわせて応えていたように思います。最近の小中学生、高校生の「将来になりたい職業」の10位までに「YouTuber(動画投稿者)」が入っているというニュースを聞いたりすると時代の変化を感じたりしています。高校生の上の子はそろそろ将来を見据え、大学選びをする頃で、夏休みや大学祭の

時期には、いくつかの大学のオープンキャンパスや説明会に参加したりしていますが、親としては本人の性格や特性からアドバイスをする程度で、最終的には自分で決めていくのだろうなあと思っています。みなさんの中にはすでに大学に進学する前から希望していた職業がある方もいるかもしれませんが、大学へ入学されてから、現在も模索中の方もいるかもしれません。

随分、昔の話ですが、私が大学に進学する頃には「中学・高校の教師になりたい」と思っていました。多くの科目がありますが、「宗教」という科目、キリスト教主義の中学校・高等学校で「キリスト教」を教える教師になることを希望していました。「宗教」という幅広く、仏教系の大学で同じように「宗教」の教職課程を習得した場合は「仏教」を教える教員免許を得るわけですが、キリスト教主義の学校で、プロテスタントで…と絞られていくとかなり狭き門だったことを後で

知ることになります。

キリスト教との出会い

私の「キリスト教との出会い」は家族がスタートでした。我が家は父母姉私弟の5人家族で、元は全員ノンクリスチャンの家庭でした。最初に姉が受洗しクリスチャンとなり、次に母と私、弟が中学1年生で、そして最後に父が洗礼を受け、家族全員が一代目です。私が受洗したのは小学6年生のときでしたが、当時の牧師先生が「洗礼は入学式のようなものだから、これから神さまのことを学んでいけばいいのですよ」と言ってくれ、すごく安心したことを覚えています。現在も所属している教会はプロテスタントの教会で、母が子育てに悩んでいたときに、姉を連れ、教会の門を叩いたことがきっかけでした。父母が出会った職場のすぐ目の前に赤レンガの教会があり、若かりし頃の母はこの美しい教会の外観が好きで、教会から結婚式の時が鳴るときはよく同僚と見に行ったそうです。私も物心ついた頃より、日曜日には母に連れられ、姉と一緒にこの教会へ通うようになっていました。大人たちの礼拝の前に子どものための教会学校があり、そこでは聖書に書かれてある「神さま」のお話を紙芝居や絵本を使って、分かりやすい言葉で話してくれました。いつ行っても「よく来たね」とにこやかに受け入れてくれる教会学校の先生が大好きで、子どもの私にとっては、教会はとても居心地のよい場所でした。クリスマス頃は特に思い出深く、教会の前にあるくすの木の電飾が付けられ、聖歌隊の讃美歌を聴き、教会学校でもイエス誕生の降誕劇をしたり、クリスマス祝会でケーキにデコレーショ

ンしたりしたことを覚えています。クリスマスに歌われる讃美歌の歌声、松の木の葉で手作りされたグリーンのアドベントクランツには真っ赤なろうそくが立てられ、毎週、1本ずつろうそくに明かりが灯されていく美しいコントラスト。冬になると礼拝堂に置かれる石油ストーブの匂いがクランツのろうそくのロウが解け出した匂いと入り混じって礼拝堂に充満して…子ども心に今年もクリスマスが来たんだなあ実感したことを覚えています。大学生になり今度はスタッフとして教会学校に関わりましたが、今でもこのシーズンがくると五感に染みついた「教会の思い出」が無性に懐かしくなったりします。

大学職員として

大学4年生のとき、学内では継続校と云ったりしますが、当時はまだ女子校だった中学校・高等学校に教育実習へ行きました。実習を終えてからもやはり教職に就きたいと就職先を探していた際、九州のキリスト教主義の女子校で募集があると聞き、採用試験（筆記と模擬授業）を受けに行きましたが、不採用となり、途方に暮れていたときに当時のゼミの先生から大学職員の募集があると教えていただきました。採用試験を経て、母校に就職し、気がつけば「聖和大学」で15年、法人合併した2009年からは関学の職員として11年、大学職員として働かせていただいています。聖和大学では庶務的な受付業務、宗教事務、幼稚園教諭や保育士の養成校だったので学部や短大の学生の実習をサポートする実習指導室、総務、施設、経理等の部署を経験し、合併前の年は2人目の出産後、復帰したばかりでしたが、学生課に席を置きつ

つ、前任者の退職後、引き取り手のいなかった研究費関係の業務も担ったりしていました。聖和大学では毎日学校礼拝があり、金曜日の朝には毎週、早天祈禱会もあり、大学内の宗教行事のサポートを主とする宗教事務をしていた2年間は、大学で学んだことをベースに働かせていただいたように思いません。しかし、部署異動に伴い、仕事内容ががらりと変わるので、都度、自分の職員としての資質に不安を感じ、その度にPCスキルやビジネス能力、簿記、メンタルヘルス、コミュニケーション、カウンセリング等々…いつも目の前の不安を払拭する「足りないものを補う作業」の繰り返しばかりをしてきたように思います。

関学には研修制度があり昨年は集団研修でグループでプレゼンをしたのですが、今年は時代に合わせて「働き方改革」のような個人研修を選んでみました。テキストの冒頭に「人生100年時代」という項目があり、「実際に100歳まで健康で生きられるはずがない」とかマイナスなイメージも抱かすにはいられなかったのですが、あと数年で折り返し地点と考えると、昔、子どもたちに投げかけられた「母さん大きくなったら何になりたい？」という問いかけもある意味まともな質問かもしれない…と最近では真面目に考えたりもしています。関学の職員の定年は65歳ですが、長期雇用が定着化してきた時代、実際にその歳まで今の分量を同じスピードでこなされ続けるのか…という新たな不安も出てきたりしています。

関西学院での出会い

国語辞典で「宗教」を調べてみると「神・

仏など超越的存在や聖なるものにかかわる人間の営み」と書かれてあります。日本人は「無宗教」と言われたりすることが多いですが、「無神論者」ではなく、日本の文化にはいろいろな宗教が根付いて、例えば新年には神社に初詣に行き、お盆にはお寺にお墓参りに行き、クリスマスは教会へ行き、結婚式はチャペルであげ、お宮参りや七五三は神社へ行き、お葬式は仏式で行うというような…神道、仏教、キリスト教等が混在した特有の風土があると思います。

日本のキリスト教は大きくカトリックとプロテスタントに分けられますが、関西学院大学は日本にあるキリスト教主義の大学75校の一つで、プロテスタントの大学です。みなさんが関学を選択されたときの基準はそれぞれ異なると思います。学部の特徴、偏差値、校風、部活動、通学距離、就職率…いろいろな要素があるかと思いますが、恐らく「キリスト教主義の大学だから…」を理由に選択された方は少ないのではないのでしょうか。

昨年4月より社会学部の学部事務室へ異動してきて今年で2年になります。前部署の教育学部では9年間、学部事務室で働いていましたが、社会学部の第一印象は「自由だなあ〜」という印象でした。昨年の入学式後、今の2年生のみなさんと一緒に私も中央講堂で「履修心得」や「セミナーガイド」をめくりつつ、カリキュラムの説明を聞き、2016年度からカリキュラムが新しくなったことや、2年生の秋学期から6つの専攻分野に分かれ、同じ先生の下で2.5年間ものゼミ活動があること、1年生からすぐに専門科目が受講できることを知り、社会学部らしい魅力を感じました。

2年生のゼミ選択の時期には事務室でも時

折、禁断トークが展開され、先生方の顔写真入りの「セミナーガイド」をめくりつつ、「どのゼミにします？」と話したりしています。社会学部の事務室には現在、14名のスタッフがいますが、うち2名はみなさんの先輩、社会学部の出身です。事務室ではみなさんの学生生活面、授業サポート、履修相談等もしています。窓口に相談に来られた際、「社会学」を熱く語れるスタッフがいたら、ひょっとするとみなさんの先輩かもしれません…。

昨年度、異動してきた際に「社会学部」に関する資料やパンフレット、冊子等をいろいろいただきました。「まあ勉強してください。」と言って渡された中に「関西学院大学社会学部の50年」というものがありました。「写真と回想で綴る半世紀の歩み」という副題があり、1960年の創設から50年間で振り返った学部史になっており、とても興味深く見させていただきました。

冊子の後ろの方のページには先生方の記念写真が掲載されていて、ご退職された先生もいますが、教育学部の初代学部長芝田先生もいらっしやったり、失礼ながら先生方もお若いなあ〜と見入ってしまいました。元は文学部にあった2学科より社会学部が創設されたことや当時の時代背景と合わせて社会学部の歴史が詳細に記載されています。その中に社会学部卒業生へのアンケート調査をまとめられたページがあり、社会学部の卒業生のみなさんが「関学に誇りと愛着」を感じている方がとても多いことや、思い浮かべる場所としては、「時計台」「大学図書館」「中央芝生」を挙げられている方が多いことが書かれてありました。社会学部の卒業生の方が今も母校への誇りと愛着を感じられていることはとても素敵なことだなあとと思います。またこの中

には「社会学部のキリスト教教育」について書かれたページもあり、宗教主事の打樋先生がチャペルについて書いておられ、社会学部がこのチャペルの時間をとても大切にされていることを知ることができました。

先日、図書館にいたとき、パイプオルガンの音色と共に館内放送が流れてくるのを聴き、ハッとしました。私にはとても新鮮でしたが、デスクで学習をしている学生のみなさんは顔を上げることもなく、普段と変わらない様子で、本を読んだり、書きものをしたりしていたのですが、こういったみなさんにとっては何気ない学生生活の日常の根底に、しっかりと浸透しているのがキリスト教主義大学の魅力ではないかと思います。カリキュラム上、必修科目には必ず「キリスト教学」があり、ABを通して旧約聖書と新約聖書を学ぶ機会がみなさんにはあります。社会学部では授業実施日の火・水・木曜日にはチャペルアワーがあり、学生のみなさんが自由に参加することができます。先生や友人が語る言葉を通して神の存在を身近に感じたり、心に響く聖句に出会うこともあるのではないのでしょうか。

関西学院大学ではクリスマスになると点灯式が行われ、時計台前のツリーに電飾が灯され、キャンパスの美しさをより一層際立たせています。聖歌隊の讃美歌の歌声やパイプオルガンの音色…。四季を感じることもできる美しいキャンパス。みなさんが社会学部や関学で過ごした日々。学問だけでなく友人や恩師と熱く語り合ったことも、関学でのすべての出合いがみなさんの五感に染みこんで、きっとこのキャンパスを巣立った後も記憶の中に深く残されていくのではないかなあと思っています。
(社会学部職員)